

NEWS FID +

CONTENTS

研究授業レポート

「運動学B」理学療法学科 高取 克彦	1
「保健医療福祉システム論Ⅱ」看護医療学科 廣金 和枝	1
「栄養アセスメント演習」健康栄養学科 村木 悦子	3
「人間工学実験」人間環境デザイン学科 東 実千代	4
「養護概説」現代教育学科 高田 恵美子	5
2019年度FD活動報告	6

研究授業レポート

「運動学B」

理学療法学科 高取 克彦

運動学は一回生時に学習する解剖学や生理学を基礎とし、さらに生体力学的な知識を加えながらヒトの関節運動から骨関節系疾患の発生メカニズムに至るまでの理解を深める科目となっています。理学療法学科のカリキュラムでは専門基礎科目に位置付けられ、かなり広範囲の授業内容となるために、運動学AとBの2つに分けたものとなっていますが、内容的には連動しています。どちらも二回生前期科目となっているために学生は週二回ペースで授業が進行していくため、こまめな復習が重要であることを常に伝えるように意識しています。また、力学や関節構造など教科書の内容に偏らないように、疾患との関連性を説明する場合はなるべく私自身の治療・評価経験を交えて話すように心がけています。

今回は膝関節の関節運動学と関節周囲の靭帯の役割、スポーツ外傷で頻度の高い前十字靭帯損傷、交通事故などで見られる後十字靭帯損傷と発生メカニズム、さらに靭帯再建術後の理学療法における原則について講義をさせて頂きました。各靭帯の構造的な役割と運動療法における適応と禁忌事項を合わせて説明することにより、なぜ術後早期にはこの運動が危険なのか、またなぜこの運動は推奨されるのか等について、理解が深まったのではないかと考えています。授業の工夫点としては、教科書が訳本であり、日本語の文章表現がわかりづらい箇所が多いため、独自の表現に噛み砕いて説明し、教科書上には記載されていない点などをなるべく黒板に図示しながら説明するように心がけています。例年、この授業は学生達にとって初めて疾患構造の理解や治療アプローチの理論的背景を理解する部分が多いため、比較的積極的に授業を受けている印象を持っています。一方、今回の研究授業を通して、改めて自らの授業風景を客観視したことにより多くの反省点も見えてきました。具体例としては学生への問いかけや授業内容に関する理解度を確認する際に、クラスの中でも積極的な態度で授業を受けている前列の学生達の反応にばかり目が行き、教室後方に位置している学生達の反応や意見をうまく引き出せていないことが分かりました。今後は後列の学生達に質問を投げかけるなど、教室全体の空気感をうまく読みながら進めて行ければと考えています。また授業研究会では、授業の理解度を確認するために全体への質問時間を設けてはどうかとのご意見も頂き、今後積極的に取り入れていきたいと思われました。この度は貴重な機会を頂きまして誠にありがとうございました。



「保健医療福祉システム論Ⅱ」

看護医療学科 廣金 和枝

看護医療学科における研究授業「保健医療福祉システム論Ⅱ」を、4回生保健師課程学生13名を対象に実施しました。教員は8名の参加がありました。

保健医療福祉システム論Ⅱは、保健師資格必修科目で、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の「保健医療福祉行政論」に該当する科目です。本科目は、看護師資格必修科目である保健医療福祉システム論Ⅰに上乘せする形で、保健師に必要な知識を教授する内容で構成されており、保健・医療・福祉の計画の企画及び評価について実践的に学ぶ内容を含めることが求められています。

本学では、保健医療福祉の計画・評価を実践的に学ぶために、公衆衛生看護学実習における実習市町村の保健医療福祉計画を題材に、PDCA サイクルに関する情報収集・分析をおこなって報告することを、実習市町村グループ毎に課しています。情報収集は、前期の演習授業において行う地区踏査や後期の実習期間中などに行い、履修者全員が公衆衛生看護学実習を終了した12月に、授業内で発表会を行います。この発表会をおこなうことで、自身が配当された実習地以外にもさまざまな保健医療福祉計画のPDCAサイクルのスタイルがあることを知り、それらがその地域特性に根差しその地域で実現可能な方法で展開されていることを、発表内容を共有することによって学ぶことができます。今回の授業はその初回授業で、保健師資格必修科目群における本科目の位置づけ、看護師資格必修科目との関係等について理解を図る科目ガイダンスをおこなった後、第1回授業の内容に入っていました。第1回授業では、グループ課題を遂行する上で必要な基礎的知識として、「保健医療福祉計画の計画・実施・評価の概要」をテーマに、講義を展開しました。基本的な用語の定義を解説し、それがどのように実在の保健医療福祉計画上に表現されているのかを、A市の総合計画と健康増進計画のPDCAサイクルの実例を用いて示していきました。学生には、その合間に、実習予定の市町村の総合計画をサーフェスを用いて検索し、その基本構想や基本計画等を実際に確認してもらいました。

行政計画は、そもそも主体となる住民のものであり、それを具現化する住民参加の意義と具体的な参加・参画方法について学生の理解を図ることは、地域全体を支援する保健師を育成するために必要不可欠です。今回の授業では、住民参加のバリエーションを示すため、A市の他に、比較的多様な団体による住民参加の体制をとったY市の展開例も紹介しました。



最後に、グループ課題とした実習市町村の行政計画である健康増進計画の分析の詳細について提示する予定でしたが、時間切れとなり、2コマ続きの次の時限にそれを持ち越して研究授業が終了しました。4月26日に行われた授業検討会では、教員7名に参加いただき、多くの示唆と励ましをいただきました。授業展開の時間配分などについてはほぼ授業計画通りとお褒めの言葉をいただきましたが、映写資料と配布資料に違いを持たせた箇所を忘れて講義を進めてしまい、説明がちぐはぐになる場面がありました。そのため、映写資料と配布資料の違いを

持たせることの是非がディスカッションのテーマとなり、活発な意見交換ができました。最終的には、意図的にねらいをもって違いを持たせるのであれば、それも方法であるという結論に至りましたが、学生が「迷子」にならないよう留意する必要性も参加者の間で再確認できました。今回は、保健師国家試験受験資格の取得を目指す学生に対する授業であり、20人に満たない学生への発問は、緊張している学生への遠慮から普段のスピード感をもって次々で行うことはできませんでした。しかし、本科目は4年次科目であり、適切な発問は、関連知識を整理・統合するよい機会になります。今後も、看護師資格科目を含め、これまで修得した学修内容の整理・統合のきっかけとなるよう、適切な発問を講義の中に入れていきたいと考えています。

看護医療学科では、地域における支援活動を研究課題にされている先生が多いですが、「地域の支援のため

の前提として地域行政を理解していたつもりであったが、点と点の理解が、改めて線でつながった」という感想を直接いただくこともでき、私の励みにもなりました。

お忙しい中、研究授業にご参加くださった先生方、授業検討会で素晴らしいフィードバックをくださった先生方に、改めて御礼申し上げます。

「栄養アセスメント演習」

健康栄養学科 村木 悦子

本科目は臨床栄養コースの推奨科目で、履修者は病院または高齢者施設の管理栄養士を目指す 20 名の 3 回生で構成されています。「臨床栄養学Ⅰ（総論）」と、「臨床栄養学Ⅱ（各論の一部）」で修得した、管理栄養士に必須な栄養アセスメントの知識や技術を生かし、実際の臨床症例を用いて、栄養管理が重要な疾病に対して適切な栄養管理ができる能力を養うことを目的としています。

初回授業で病院管理栄養士を招いて、臨床現場での症例に対する考え方を学習した後、教員が提示した 5 つの症例の中から学生同士で話し合っ、症例担当者班(1 班 4 名)を決定します。2・3 回目で症例担当班に分かれて症例検討会の準備をし、4 回目から 13 回目まで症例検討会を行います。各症例検討会で得られた意見等を 14 回目に症例担当班で話し合っ、栄養指導の準備をし、15 回目に模擬患者を相手に症例担当班で栄養指導し、模擬患者からフィードバックしてもらった後、栄養指導報告書を作成します。



症例検討会は、症例担当班をファシリテーターとし、2 回分の授業を用いて履修者全員で討議します。症例担当班は症例検討会の 1 週間前に症例検討会用資料を配布し、症例担当班以外の履修者は、配布資料を参考に、各自考えをまとめた

上で症例検討会に参加します。症例検討会当日は、症例担当班が決めた討議内容や時間配分に沿って、小グループ(症例担当班 1 名+担当以外の履修者 4 名:教員が決めて症例検討会当日に発表)討議と、全体討議を組み合わせ、栄養指導に向けて栄養アセスメントおよび栄養ケアプランニング、栄養教育等の一連の栄養管理を構築します。本研究授業は 5 症例目の症例検討会の初回で、病気に対する受け入れが悪く、近医から転院してきた慢性腎不全で透析歴 1 年半の外来患者について検討しました。症例担当班より事前課題として、症例の問題抽出と、その問題に対する改善策を考えてくるよう指示があったため、それらを中心に話し合われました。各小グループとも患者の問題点は簡単にピックアップできましたが、患者の性格や生活背景を上手く察することができず、患者の生活とかけ離れた改善策が提案されていました。そこで、各小グループを巡回しながら、提案された改善策に対して疑問を投げかける様な形で教員より助言を行い、学生達に考えさせました。その結果、学生達は患者の性格や生活背景について、自分達が思う「常識」の枠を超えて意見を出し始め、全体討議では各小グループから出た意見に対して、お互いに疑問をぶつけあうようにして、活発な討議をしてくれました。授業の最後には、教員より今回の討議についての良い点と検討の余地がある点を話し、次回の検討会に向けて、どこに目を向けて考えるべきかをアドバイスしました。これまでの「臨床栄養学Ⅰ・Ⅱ」で、学生達は栄養アセスメントの知識は十分に身につけており、自分の考えをまとめられるようになりつつありますが、他者と意見をぶつけ合っ、自分達で討議を仕切ったり、複数の意見をまとめて栄養管理計画をくみ上げていった

りすることには慣れておらず、本科目を通してこれらの「ワザ」を修得して、実践の場で活かしてくれることを期待しています。

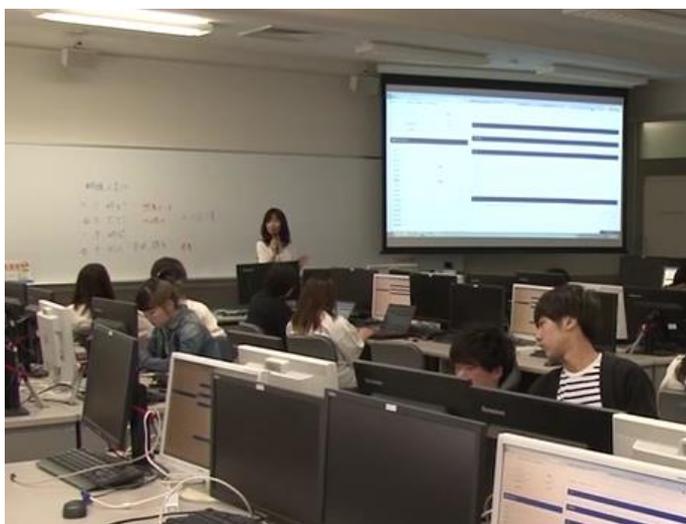
最後になりましたが、研究授業にご参加いただきました教職員の方々に深謝いたします。

「人間工学実験」

人間環境デザイン学科 東 実千代

今回研究授業を行った「人間工学実験」は2回生前期に担当されている選択科目であり、1回生後期担当の必修科目である「人間工学」で学んだ知識を、物理的な条件と人間側の測定を通して定着させることを目標としています。実施形態としては、受講生を10名程度で班編成し、実験の進め方などは、班長と副班長を中心とした自治を尊重しており、各班の特色が感じられることが毎年の楽しみでもあります。当初は毎回実験を行い、レポートは次週までに各自で作成して提出させていましたが、数年前より、データ整理や解析も授業時間内で実施するよう変更しました。2回生前期担当ということもあり、添削して個々のレポートにコメントを返すより、学生間で疑問に思う点を共有し、相談しながらデータ解析を進めてもらい、質問に対する回答は全体に返す方が良いと考えたからです。

さて、今回の研究授業では、全6課題のうち、第3課題である「室内照度・視対象対比の違いによる明視性評価実験」のデータ解析を行いました。室内の明るさや視対象の対比という物理的な条件の違いによる見やすさを評価し、明視性に関わる要素(大きさ・明るさ・対比・時間)の理解を深め、視環境計画のあり方を考察することが目的です。実験データ(数値の羅列)を前にして茫然とする学生のために、基本的な図表が作成できるよう、データ入力用のエクセルシートと実験時に配布したレジュメ等はCEASに掲載しておき、最初の一步が踏み出しやすいよう工夫しています。授業の流れとしては、①配付資料の確認、②実験内容の振り返りと要点の解説、③前



課題のレポート講評、④今回のデータ解析に関する説明、⑤各班でデータ入力作業、⑥入力データをもとに各自で図表作成、⑦レポート作成・提出となります。⑤の作業以降は教員が教室内を巡回し、質問に対応します。第1課題では心理的に必要なクリアランス測定、第2課題では断面形状の異なる持ち手の持ちやすさ評価、第4課題では椅子の寸法測定と心理評価、第5課題では統計的官能評価を行い、最後の第6課題は自由課題とし、各班で実験の立案、実施、解析を行って発表してもらいます。学生たちには、第1・第2課題は三輪車、第3、第4課題は補助輪付きの自転車、第5課題あ

たりから補助輪を外す練習、第6課題では私が手を離してもスイスイ走るのよ、と話しています。口を揃えて「エーッ！」と言われますが、レポートの感想に、「実験がこんなに大変(面倒)だとは思わなかった」と書いていた学生が、徐々に自分なりの気づきで図表を追加作成し、実験のよりよい進め方を提案してくれることもあります。履修する演習科目の成果物の多くが図面や模型などカタチあるもので、この科目が相対的に地味(?)であることは否めませんが、人間測定の奥深さや地道に取得したデータから傾向や規則性を発見する楽しさを伝えたいと思っています。

授業検討会では、学科の先生方に何名かの学生のレポートを回覧し、ご意見やご質問を頂きました。色彩論の授業内容が今回の課題の考察に役立ったとの感想を書いている学生もおり、改めて授業間の連携の大切さを感じました。

最後になりましたが、研究授業および授業検討会にご参加いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

「養護概説」

現代教育学科 高田 恵美子

「養護概説」は2回生前期に開講している専門科目で、「養護教諭の基本的な職務と役割への理解」と「子どもの心身の健康課題を解決するための知識や技能の習得」を到達目標としています。さらに、学生が資料作成やプレゼン力、実践をイメージした対応や評価できる力を身に付けることを目指して、仮想学校による体験的な学びを中心に進めています。研究授業では、「健康観察」について学修しました。

教育現場では「健康観察」が日常的に行われていますが、その意義はあまり理解されておらず、形式的な実施に留まっている場合が多いという報告があります。本学学生には養護教諭として現場に出たときに、「健康観察」の意義を踏まえて学校の実態に応じた「健康観察」の在り方を提案できるようになってほしいと願っています。そこで、「健康観察」の方法を具体化するために、前回の授業で、学生がグループごとに健康観察の方法を話し合い、研究授業ではその結果をロールプレイングの形態で交流しました。交流では、「健康観察カードを週末は自宅に持ち帰る」「一斉に集めるのではなく記入できた子どもから健康観察カードを提出する」「健康観察カードを個人ファイルに綴る」「保健室まで付き添った保健係の子どもに保健室での対応を伝言する」など様々な工夫がみられました。交流内容をもとに、「健康観察」で大切にしたい「家庭との連携」「自分の健康状態をその子どものペースで振り返ること」「個人情報保護」「健康観察記録の蓄積」「担任との連携」などの意味付けをするとともに、「健康観察」の意義について確認しました。どのように「健康観察」を行うかということは、個々の子どもの心身の健康保持のみでなく学校全体の保健管理(感染予防)対策として重要です。ひいては、何よりも大切な子どもの命を守ることに関わるといっても過言ではありません。時間はかかりますが体験的に学ぶ場面を設定し、交流内容に応じて意味付けするという形態の授業が必要ではないかと考えます。

研究授業後の検討会では、学生に何をどこまで学ばせるのかという問題が出ました。教育現場に出るまでに、身に付けておいてほしいことや理解しておいてほしいことはたくさんありますが、その全てを取り上げることはできません。そこで、何よりも大切な子どもの



命を守ることができる養護教諭の養成を目指していくべきではないかと話し合いました。そのために何が必要なのかを選択していくことは大変難しいことではありますが、全てを教員が与えるのではなく、学生自身が調べ考えていくことができる環境をつくっていききたいという願いを共有しました。

最後になりましたが、お忙しいなか研究授業及び検討会に出席いただきました先生方に心よりお礼を申し上げます。貴重な機会を与えていただきまして、ありがとうございました。

2019年度FD活動報告

前期

- 4月1日 新任教職員研修会
- 4月22日 看護医療学科 研究授業（「保健医療福祉システム論Ⅱ」廣金 和枝）
- 5月24日 人間環境デザイン学科 研究授業（「人間工学実験」東 実千代）
- 6月13日 現代教育学科 研究授業（「養護概説」高田 恵美子）
- 7月19日 理学療法学科 研究授業（「運動学B」高取 克彦）
- 7月19日～ 前期授業アンケート（第14回授業日）
- 9月上旬 前期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答依頼

後期

- 12月17日 健康栄養学科 研究授業（「栄養アセスメント演習」村木 悦子）
- 1月14日～ 後期授業アンケート（第14回授業日）
- 3月上旬 後期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答依頼

*新型コロナウイルスによる感染症の拡大を受けて、3月5日に実施を予定していた2019年度のFD研修会は開催を見送ることとなりました。

2020年度研修会等の日程は決まり次第お知らせいたします。2020年度も本学のFD活動に対しご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。